

【国指定名勝 旧池田氏庭園】

洋館修復の記録

甦よみがえる大正時代の煌めききら

旧池田氏庭園の洋館は、本家庭園に配された国内最大級の雪見灯籠とともに、旧池田氏庭園のシンボルとなっています。洋館は、山形県酒田市の本間家、宮城県石巻市の齋藤家と並び、近代における東北三大地主と称される池田家により、地域青少年の教育向上を目的に、私設の公開図書館として大正11年(1922)に竣工しました。

近代から現代への大きな歴史のうねりの中で、長い年月を風雪に耐え、今再び、地域の文化資産として、時代の煌めきを取り戻しました。



## 洋館の由緒 ～秋田県内初の鉄筋コンクリート建築物～

旧池田氏庭園の洋館は、秋田県内で最初の鉄筋コンクリート造建築物です。大正11年(1922)の竣工で、外壁は白磁のタイル張り、御影石の基壇が廻り、車寄せの柱には国外から取り寄せたと言われる白色大理石が使われています。シャンデリアが煌めき、金唐革紙の壁紙が部屋を彩る、ルネサンス様式を取り入れた洋館です。当時の最新の技術と最高の資材が惜しみなく注ぎ込まれた、非常に価値の高い優れた近代の建築物であり、旧池田氏庭園の象徴のひとつとなっています。

池田家邸内に建てられたこの建物は、私設の公開図書館として向学心を持つ地域の青少年に開放され、地域青少年の教育向上に大きく寄与しました。また、食堂兼音楽室、玉突き室などが設けられ、青少年の交流の場として、また池田家を訪れた方々をもてなすための迎賓館としても利用されました。

## 洋館の概要と修復理念

名勝 旧池田氏庭園洋館で行われた「保存修復」と一般的な建物で行われている「営繕的改修」の大きな違いは、建物の修復と同時に様々な歴史的調査が工事と平行して行われたことにあります。破損した建物を単に直すのではなく、調査によって判明した建物の歴史や当時の技術を将来に伝えることに保存修復の大切さがあります。特に今回のような大規模な修復の場合には、『修復工事報告書』に修理工事の詳細をまとめ、書籍として記録に留めることも、文化財建造物の伝承として重要な仕事のひとつとなります。

文化財建造物の修復では、古い材料や工法を少しでも多くを残すことを主眼におき、本洋館で進められた作業では、当初から在ったと判断された内装やシャンデリア、本棚などといった古い材料を補修して再利用する修復が行われました。また、保存修復では、このような古い材料や工法に価値があり、部材のひとつひとつが貴重なものなので、取り外す作業や保管方法、その後の補修や組立作業に際しては各部材が慎重に取り扱われ、かつ丁寧な補修作業を根気よく行うことが求められます。

このため、当現場においても現場に従事する職人や技術者は、工事期間を通じて「ものを大切に作る」という心構えを以て作業にあたるよう努めました。



外観(修理前) 南西より

手前の外壁の破損が著しく、窓枠も失われていました



内観(修理前) 2階食堂

壁紙は剥がれ、内装の大部分が破損していました

池田家には洋館建設当時の日誌が残されています。これによれば、設計者は秋田市出身の建築家今村敬輔(建設当時は東京在住)、現場監督・青島権一、施工者・三須清徳は共に東京在住。電気業者は河原田電灯会社(角館・建設当時は東京所在)が担当しました。建築の用途は図書館で村民に開放、後に1階を事務室、2階を会議室として昭和37年(1962)まで使用されていたと記録に残されています。

蔵書は歴史、哲学、産業等多岐に渡ります。和綴本が中心で、蔵書の内約400冊が現在の大曲図書館に収蔵されています。なお、十四代池田文一郎(1893～1943)は、県立図書館大曲分館長を務めました。

- 【設計仕様】 ●構造/鉄筋コンクリート造 2階建
- 屋根構造/切妻屋根 銅板一文字葺
  - 屋根小屋組/キングポストラス形式
  - 基礎/御影石基壇取廻し ●外壁/白磁タイル張
  - 内装/漆喰及び金唐革紙仕上 ●建築面積/151.9㎡
  - 延床面積/303.8㎡(バルコニー含) ●坪数/約92坪
  - 高さ/11.7m(基壇含) ●部屋数/7室
  - 竣工/大正11年(1922)6月(着工 大正9年7月頃・同年11月上棟)
  - 設計者/今村敬輔 ●建築費/102,568円(家具調度品・雑費含)





南側 立面図



西側 立面図



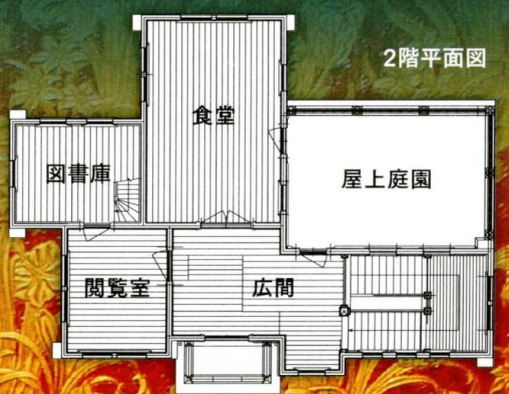
北側 正面 立面図



東側 立面図



1階平面図



2階平面図



## 【修復工事の概要】

修理前の破損状況としては、鉄筋コンクリート造の躯体において、コンクリートのかぶり厚さが全体的に薄く均一でないため各所でコンクリートが脱落し、鉄筋がむき出しになっていました。また、創建時の施工班によるジャンカ(骨材の砂利分離)が多く、コンクリートの中酸化が全体的に進んでいました。この他、外壁の破損・汚損、屋根からの雨もり、シャンデリアや金唐革紙といった内装の破損・欠失などが確認されました。

このようなことから建物はコンクリート躯体の健全化を目的とした根本的な修理が必要であり、その他の破損部分も含めた大規模な修理となりました。工事では躯体修理で支障となる内部の床・建具等の造作および壁天井の漆喰を一旦解体し、躯体の修理を行った後、造作類を補修して元の位置に戻しました。屋根の鉄板葺も創建時は銅板葺であったことが判明し、復原が行われました。

今回の修理では、詳細な調査を行うことで創建からこれまでの改変を明らかにし、建設当時の姿に戻しました。



## 躯体補修工事(平成18年度・19年度)

大正11年(1922)に竣工した旧池田氏庭園洋館は、鉄筋コンクリート造の建物としては秋田で最初のものといわれています。現在は建て替えられてしまった東京・丸の内丸ビルが竣工する前年に竣工しており、現存する数少ない大正期の鉄筋コンクリート建築であることから、修理にあたっては老朽化や経年劣化等についての詳細な調査を工事と並行して行いながら、補修作業を進めました。



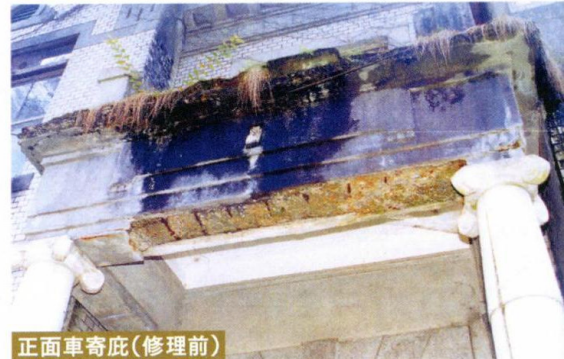
1階玉突き室(修理前)

右手壁面の木製建具は全て崩れ落ち、天井および床板も部分的に腐朽・脱落していました。



西側外壁(修理前)

タイルの汚損・脱落が進んでいました。



正面車寄庇(修理前)

庇先端および梁下端のコンクリートが脱落していました。

### グラウト充填工法

セメントを主成分とする充填材(グラウト)を構造体のすき間部分に打設し、再強化を図る充填工法です。断面欠損の大きな外壁柱型や内壁などに用いました。

### プレパックスドコンクリート工法

あらかじめ型枠を設け、隙間部分を粗骨材で埋め、パイプ等でセメントペーストを充填する工法です。形の複雑な構造物などにも応用できます。断面欠損が大きく、上からのコンクリート打設が不可能な部分に用いました。

### リフリート工法

中性化により劣化した鉄筋コンクリートの表面に浸透性アルカリ性付与材を塗布し、内部からコンクリートの耐久性を高め、防錆成分を含むポリマーセメント系断面修復材を組み合わせて使用する躯体改修工法です。壁のジャンカ部分など、小さい断面欠損の補修に用いました。

### スラリー注入工法

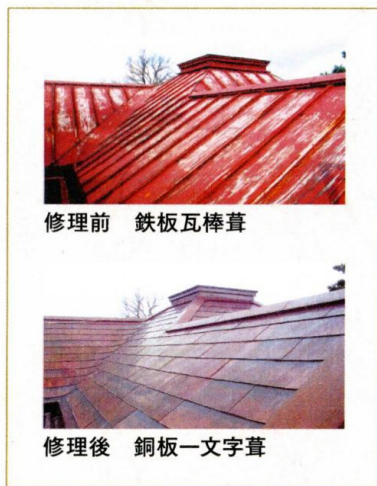
ひび割れやジャンカ(砂利骨材の内部分離)部分を補強するため、コンクリート壁面に小さな穴を等間隔に空け、セメントペーストを注入することで耐久性を高める修復工法です。壁内部の空隙を埋めるため、建物全体にセメントスラリーを注入しました。





## 屋根工事(平成18年度・19年度)

現状の屋根を調査した結果、創建時は銅板一文字葺だったことが判明しました。そこで、今回の修理では、鉄板瓦棒葺から銅板一文字葺に復原しました。



修理前 鉄板瓦棒葺

修理後 銅板一文字葺



①現状のカラー鉄板葺を解体すると、亜鉛引鉄板一文字葺があらわれました。



②木端葺(ザク葺)には瓦棒芯木を止めていたと思われる鉄釘が残っていました。



平成19年度現場見学会(現場公開)の様子

③一部木端葺を解体したところ、野地板にアスファルト・ルーフィングの黒い染みと、吊子を止めた釘跡および吊子の一部と思われる銅片が確認されました。吊子釘跡の間隔は登り方向に9寸(273mm)でした。これにより当初は葺足9寸の銅板一文字葺が葺かれていたことが判りました。

## 木工事(平成19年度・20年度)

鉄筋コンクリート躯体補修のため一旦取り外した木部材は、原則再利用しました。その際、破損・腐朽している部分については、同種同質の木材を補って修理しました。



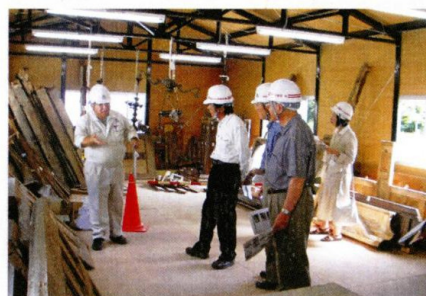
部材の破損部を切除し仕口を刻む。



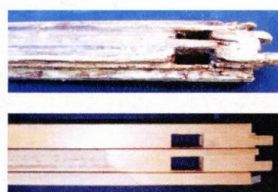
その形状に合わせて補修用の木材を加工し、



脱落しないように接合する。



平成20年度現場見学会(現場公開)の様子



建具枠の腐朽状況(上)と、補修後の状況(下)。



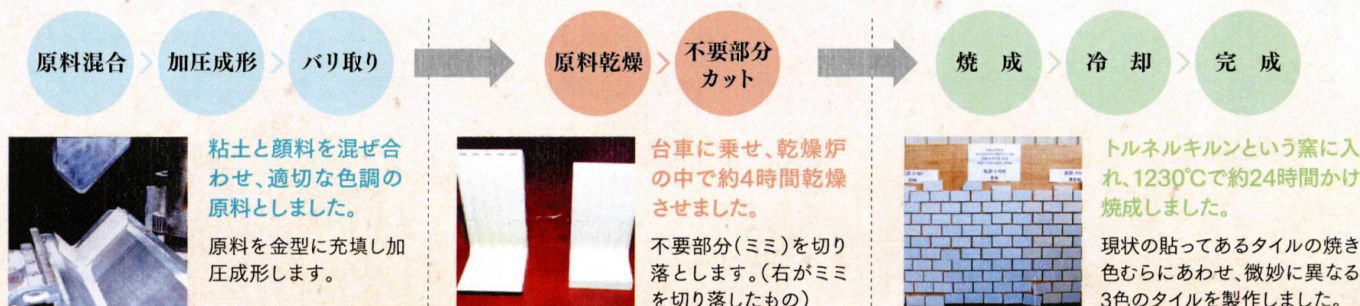
補修を終えた建具枠を窓開口に据えつけた状況。建具枠(左側)、色の明るい部分が補修箇所。

### ベニヤは高級建材!?

洋館で使用されている材木は、外回り建具などにはヒバ、内装造作等にはヒノキなどが使用されています。一方、華麗で豪華な洋館の天井や建具ドア、腰高の壁などに使用されている部材の一部はベニヤ板です。ベニヤは、現在ではホームセンターなどでも売られている一般的で安価な建材ですが、創建当時の大正時代には、最先端技術で製作される高級建材でした。

## 外壁タイル工事(平成20年度)

浮きや割れのため剥がれたタイルは、補足分を復原製作し貼り付けました。製作は岐阜県多治見市の(株)アコーセラミックで行いました。





# 甦る大正時代の煌めき

よみがえ

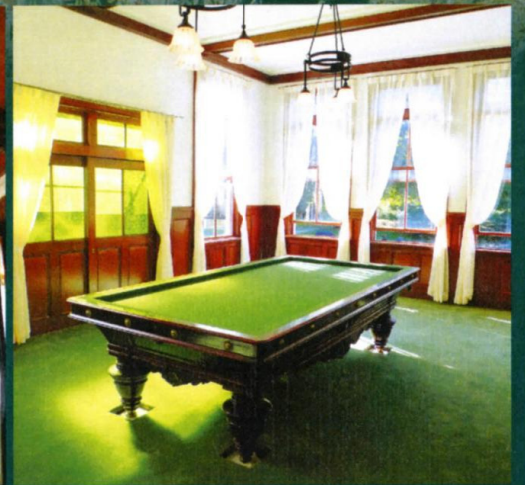
きら



復原された金唐革紙の煌めき  
1階食堂兼音楽室



復原された金唐革紙は国会議事堂の  
一室と同じ柄 2階食堂



玉突き室とビリヤードテーブル(参考展示)  
(大仙市大曲佐々木家寄託資料)



庭園を見下ろし展望を楽しむ屋上庭園(バルコニー)



黄金の羊で飾られたシャンデリア 2階閲覧室



1階書庫と書棚(復原)



## 洋館を見守る黄金の羊

2階閲覧室のシャンデリアには館内唯一、動物の装飾が施されています。痕跡調査により、わずかに残されていた金メッキを確認。純金により再びメッキされ、竣工当時の黄金の羊(羊頭)がよみがえりました。羊は、西洋ではキリスト教と深い関わりのある古来からの象徴動物。日本でも、羊は性質が善く温和で協調性に富み、繁栄を意味する動物として干支にも使われている縁起の良い動物。洋館を見守ってくれているのかもしれない。



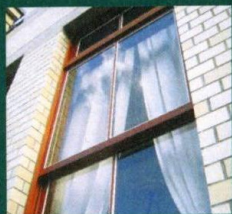
## 三色の白磁タイル

洋館外壁に貼られた白磁タイル。日の光が差し込めば、まさに大正浪漫が漂う「白亜」の洋館。白磁タイルは、全体のうち約2割が破損のため交換されました。貼り直されたタイルをよく見ると、微妙に色の違う三色のタイルが貼られています。これは、当時の焼成技術では、焼きむらが生じていたことから、それを踏まえた復原をするための措置。また、当時のコーナー用のL字型タイルは、角が直角(ピン角)。その復原のため、焼き型製作からの完全オーダーメイドとなりました。



## 窓ガラスに漂う大正時代のゆらめき

洋館修復における復原部材の中で、創建時そのままに復原が困難だったのが、窓ガラス類。1階玉突き室の緑色の型ガラスは、同等品が国内で見つけられず、アメリカからの輸入。透明窓ガラスをご覧いただくと、一部の窓ガラス表面の「ゆらめき」に気づきます。当時の製造技術の未熟さにより生じるものですが、技術の進化した現在のガラスメーカーでは、逆に表面がゆがんだ窓ガラスの製造は困難。創建時の窓ガラスの残存割合は約7割。破損すれば永遠に失われてしまう、貴重な大正時代のゆらめきなのかもしれません・・・。



## 見つけ出された金唐革紙の版木ロール

東京都王子の、とある製紙工場が閉鎖となり、その後、日本加工紙の工場に移され、忘れ去られていた金唐革紙の版木ロールがある大学の先生により偶然発見されました。その数、約130本。さらにその後、紙の博物館に引き取られ保管されていました。その中に、池田家洋館の2階食堂でも使用されていた金唐革紙の版木ロールが含まれていました。しかも、奇跡的にロット番号まで完全に一致。この版木ロールは修理され、洋館修復の金唐革紙復原において長い年月を越え、再使用されました。幸運にも2階食堂の金唐革紙の図柄は、大正の創建当時の完全な姿に復原されたのです。



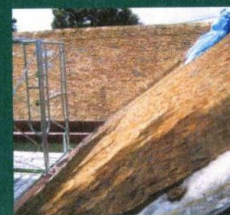
## 床板に残された設計図

2階閲覧室の床に敷かれた絨毯の下には、漆喰の天井蛇腹の仕上げ図面が墨書きで残されていました。天井蛇腹や、シャンデリア周囲の円形の美しい中心飾り・・・。創建にたずさわった左官職人達の息づかいが感じられます。ちなみにシャンデリア周囲の漆喰装飾は創建当時のもの。内装解体時に装飾部分を壊さないよう大きくりぬき、修復時にそのまま戻したものです。創建当時の左官職人の高度な技術、丁寧で美しい仕上がりをシャンデリアのきらめきと共にご覧ください。



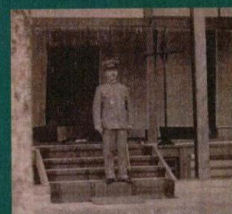
## 屋根に刻まれた歴史

洋館修復に際し、最初に取りかかったのが、躯体コンクリート補強と屋根の修理。屋根の仕様については、解体調査により、創建時の銅板一文字葺きから、亜鉛引鉄板一文字葺き、そして鉄板瓦棒葺きという変遷が解明されました。亜鉛引鉄板は戦時中の配給物資であることが判明。戦時中の金属供出として、銅板葺きから改変された可能性も推測されます。そして平成の世、ふたたび銅板葺きへ。ちょうど屋根修復の頃に、北京オリンピックの建築特需のため銅の値段が高騰。設計の変更、銅材の確保、為替変動と購入のタイミングに苦慮させられました・・・。



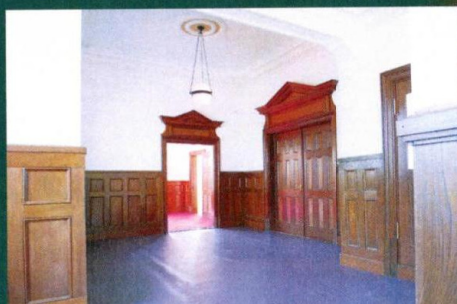
## 大正9年の池田家

洋館の竣工は大正11年(1922)ですが、着工されたのが大正9年。工期は2年間でした。大正9年は池田家にとって重要な年となりました。同年6月に、閑院宮様(元帥)が陸軍大演習の下見のため池田家に御台臨。さらに、同年10月には、閑院宮様と梨本宮様が数日間にわたり御滞留されました。洋館の着工は、同年(大正9年)の6月から7月頃で上棟式が11月。洋館の用途は、青少年のための私設公開図書館であり、そして、食堂・音楽室・玉突き室・屋上庭園(バルコニー)を備えた賓客をもてなすための迎賓館。宮様の御来訪という荣誉が洋館建設の動機の一つとなったのかもしれない。



陽の光が  
差し込む踊り場

ドア上部を飾るペディメント  
(三角形の飾り) 2階広間





## 塔屋ドーム復原 (平成20年度)

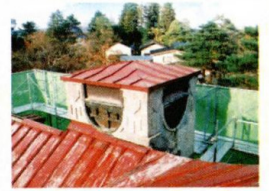
塔屋屋根解体中に、小屋内から「合掌」と墨書きされた部材が発見されました。この合掌を仮組みしたところ、現状の屋根より高い位置まで小屋が組まれていたことが分かりました。洋館創建時頃の古い写真には、塔屋にドーム状の屋根が確認でき、その物証が明らかとなったので、今回このドームを復原しました。小屋内に残存していたモルタル片から、当初ドームの仕上げはモルタル洗い出し仕上げであったと判断され、これに倣って施工を行いました。



創建の頃の古写真  
(矢印がドーム)



修理前の外観  
(矢印が塔屋)



修理前の塔屋屋根



塔屋の屋根を解体した状況  
小屋内に当初の合掌が残存していました



仮組みし合掌の高さを推定



洗い出し仕上げのモルタル片を小屋内から発見



加工小屋で仮組みして  
納まりを確認



ドームの小屋組  
(合掌トラス)

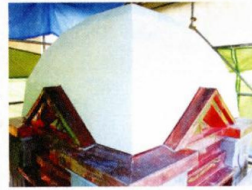


小屋組に野地板を  
張ります

ドームの施工にあたっては、一度地上でドームの小屋組を仮組みして、構造を確認し、その上で再度塔屋上で小屋組の組み立てを行ないました。小屋組の組立後には、小屋内から発見された洗い出し仕上げを見本として、モルタルを塗りつけ、その後水洗いして擬石仕上げとしました。



モルタルを塗り付け、  
その後水洗いして  
洗い出し仕上げ  
(擬石仕上げ)とします



完成したドーム



建物の下から  
見上げた完成ドーム



平成20年度  
現場見学会(現場公開)の様子

## 建具工事(平成21年度)

窓や扉は、歪んでいたりがガラスが割れていたりして、補修が必要でした。破損したガラスのなかには、現在では入手の難しい型ガラスもありました。こうしたガラスについては、色や模様の近い型ガラスを探しました。

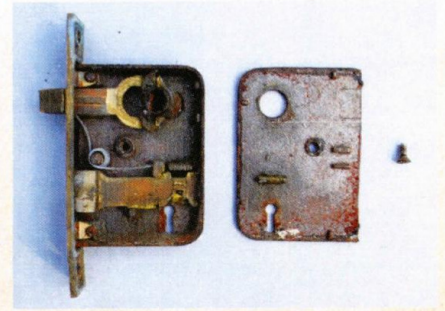
また、ほとんどの扉には掘り込み箱錠が取り付けられていましたが、金具が錆付き破損することで扉の開閉が難しくなっていました。今回の修理ではこうした金具の補修も行っていきます。



建具の補修作業



建物に残っていた型ガラス(左)と  
取替用に新たに探した型ガラス(右)

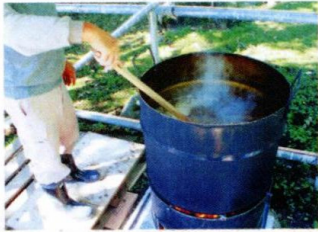


扉の掘り込み箱錠



## 左官工事(平成21年度)

建物に残されていた漆喰仕上げを再現するため、左官作業は漆喰づくりからはじめました。現場での漆喰づくりは、今日ではほとんど行われていませんが、当時のやり方に倣い現場で漆喰づくりをしました。石灰、砂、<sup>すさ</sup>苺、ノリ(左官用の海藻ノリ)をこね合わせた漆喰を用いて、壁の下塗り・中塗り・上塗り作業を行いました。



漆喰のノリ炊き作業



漆喰の練り合わせ作業



壁漆喰の下塗り



漆喰天井蛇腹は引き型という  
コテで仕上げる

## シャンデリアの補修(平成21・22年度)

建物内のシャンデリアは、錆やほこり、欠失した部品などにより修理が必要でした。また庭園灯のように、照明が失われてしまっていたものもありました。失われた照明器具は、取付の痕跡や古写真、当時のカタログを参考に新たに復原製作されました。

### シャンデリアの修復

電灯の傘はその大部分が外され、池田家味噌蔵に残されていました。失われていたものは当時のカタログなどを参照するなどして復原が行われました。器具本体部分については、痕跡調査により、純金メッキと黒色のメラミン焼付・クリアー塗装で修復されました。



修理前のシャンデリア(2階閲覧室)



修理中のシャンデリア(2階閲覧室)  
パーツごとに分解、修理しました



2階閲覧室シャンデリア 修理の終わった  
シャンデリアを再び取り付けました

## 内装の施工(平成22年度)



カーペットの敷き込み作業



リノリウムの敷き込み作業



カーテンの吊り込み作業

### 当時の最先端建材 リノリウム

リノリウムは、塩ビ等が発明される以前の、麻や油などの天然素材から製造される防水性をもつ床敷き材です。古くは病院や公共施設などで使用され、洋館創建時(1922・大正11年)の新建材でした。現在、国内では製造されていないため、修復に際しオランダから輸入しました。(国内初のメーカーの東リの創業が1919年)

## 洋館を飾った金唐革紙

### 【館内で使用された6種の金唐革紙】

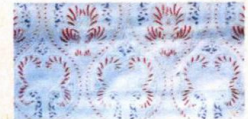
明治時代から昭和初期にかけて日本で作られた金唐革紙は、ヨーロッパの宮殿など、国内外の建物の内装を飾った高級壁紙でした。旧池田氏庭園の洋館でも、国会議事堂で使用されたものと同じ柄の金唐革紙が2階食堂に貼られていました。館内にそれぞれ特徴をもった6種類の金唐革紙が使用され、内装にアクセントが添えられています。



2階 食堂(壁・復原対象)  
THE ISPAHAN唐花



1階 食堂兼音楽室(壁・復原対象)  
THE EARLY SPRING早春



1階 玉突室(壁)  
THE CONSTANCE



2階 閲覧室(天井)



2階 閲覧室(壁)



1階 閲覧室(推定)



きんからかわかみ

# 金唐革紙の復原と貼り込み(平成20・21・22年度)

きんからかわかみ

金唐革紙とは、もともとはヨーロッパで壁の内装などに用いられた金唐革を和紙で再現した擬革紙です。金唐革紙は金属箔を貼った手すき和紙に、文様を彫った版木棒を重ね凹凸をつけ、彩色して仕上げた最高級の壁紙です。箔の上に塗る塗料次第で、金色にも落ち着いた色合いにもなります。日本で開発された金唐革紙は、明治の頃には、ヨーロッパで高い評価を得、輸出も盛んに行われました。しかし大正中期以降は徐々に衰退し、やがてその技術は途絶えてしまいました。

「金唐紙研究所」代表の上田尚氏(国選定保存技術保持者)により、重要文化財旧日本郵船小樽支店の壁紙修復が行われたのをきっかけに、再びその製作が行なわれるようになりました。修復工事で復原した金唐革紙の製作は、東京都目白の金唐紙研究所で行われ、作業は上田尚氏を中心に2ヵ年に分けて進められました。

蔵に保管されていたスベアロールの紙質・着色方法などを調査した



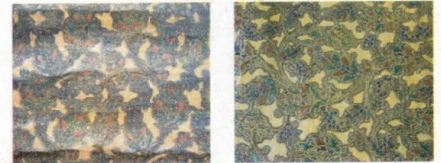
版木ロールの破損部を補修した(2階食堂)



凹凸を逆に版木ロールに柄を彫る(1階食堂)

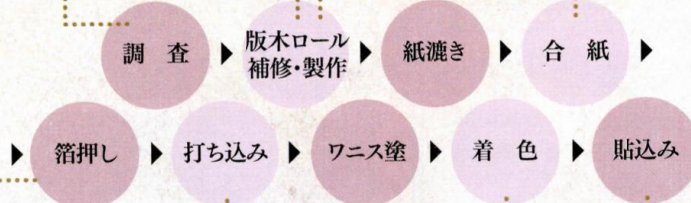


楮(コウゾ)紙と三桧(ミツマタ)紙の2種類の和紙を貼り合わせ、原紙とする



かつて国会議事堂の執務室で使われていたものと同一柄の壁紙が二階食堂で使用されており、洋館修復工事において復原が行われました。

写真左側/池田家が所蔵する往時の金唐革紙  
写真右側/修復工事で復原された金唐革紙



原紙表面に錫(スズ)箔を貼る



版木ロールに原紙を巻きつけ、刷毛で叩いて模様凹凸を写し出す



絵具を塗り、柄を浮かき出させ、古色塗りを行い仕上げる



完成した金唐革紙は1・2階食堂室の壁に貼り込まれた



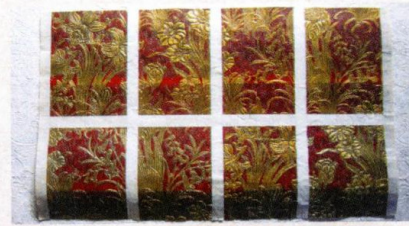
## 金唐革紙の貼り込み作業

復原された、高価で量産が困難な金唐革紙。最終工程の貼り込み作業は、袋貼りなど表具表装同様の高い技術を有する職人の手により慎重に行われました。



## 復原工程を現すサンプル

手漉き和紙の製作から、最終工程となる古色塗りまでの工程段階を現すサンプルを製作し次の修理に備えます。完成まで非常に多くの手間と時間がかかることが解ります。



## 彩色仕上げの古色塗り色見本

着色作業の最終段階として、残されていた壁紙を元に、当初の風合いを再現するための古色塗りの色見本を製作しました。



貼り込み完了状況(1階食堂兼音楽室)



貼り込み作業前の金唐革紙(2階食堂)

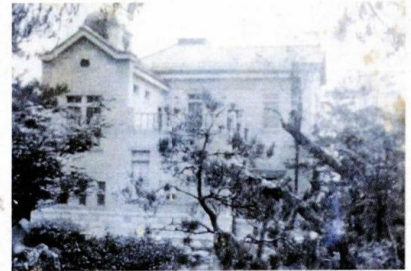


## 旧池田氏庭園洋館で実施した主な修復工事(平成18年度～平成22年度)

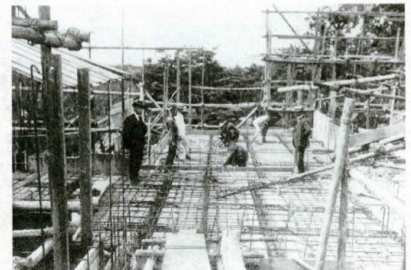
仮設工事の設置	軒足場(外部足場)、内部足場、保存小屋(解体材保管)、加工小屋(補修作業場)
躯体補修工事	躯体補修(セメントスラリー注入、鉄筋防錆処理など)、外壁柱型補修、庇先端補修、躯体一部解体 玄関円柱コンクリート補修、内部梁補修、壁補修、床空隙充填、内部間仕切復旧、2階スラブ補修など
外壁工事	タイル目地補修、外壁タイル復元製作・貼り付け、人造石塗り補修、壁面洗浄、大理石柱補修など
木工事	野地一部取替、補強材取付、床・階段・造作補修と復原、合板補修など
屋根工事	土居葺補修、銅板葺復原、軒樋銅板包み補修など
左官工事	壁漆喰塗、梁型漆喰塗、天井蛇腹漆喰塗り、平天井漆喰塗り復旧、天井中心飾り大ばらし・取付けなど
建具工事	建具補修(上げ下げ窓、欄間の一部)、建具金具補修と復原など
塗装工事	ペイント塗り・セラックニス塗り復旧など
内装工事	金唐革紙版木補修(2階食堂)・製作(1階食堂)、金唐革紙製作、金唐革紙貼り、カーテンロッド補修、 カーテン金物補修、床カーペット敷き・リノリウム敷き復原、ロールブラインド復旧整備、カーテン新調など
電気工事	電気配管・配線新設、照明器具補修と復旧整備、自動火災報知設備新設、警備保障システム新設など
雑工事	竖樋復旧整備、露台防水アスファルト舗装、手摺復旧整備、窓下水切り取付、塔屋ドーム復原、 塔屋ドーム飾り銅板復旧整備、1階内部タイル貼り補修、点検口取付、換気口補修、修理銘板製作・取付など

## 【数字で知る平成の洋館修復の記録】

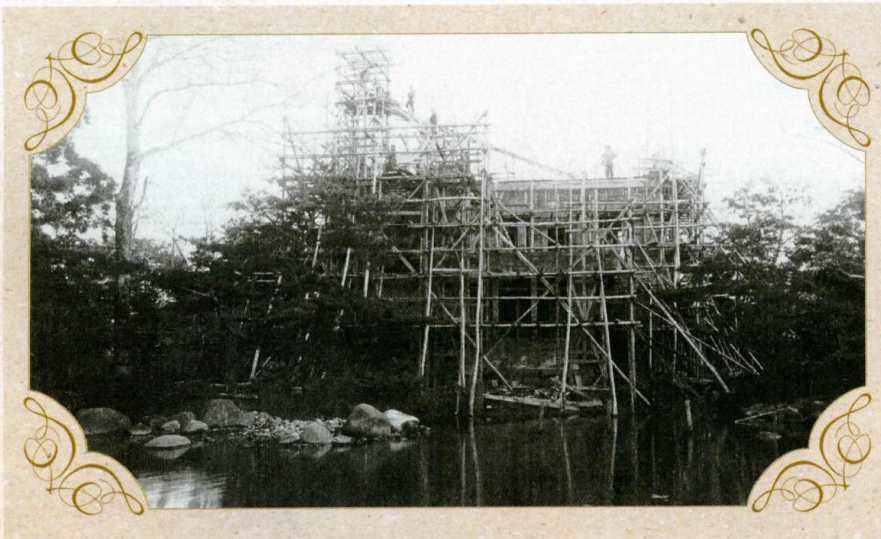
- 51ヵ月…修復工事に要した期間
- 36ヵ月…工食用足場と防護ネットにより遮へいされていた期間
- 延べ約6,000人工…修復工事に従事した職人・作業員の延べ総人工
- 延べ約90人日(1年間)…修復工事実施設計図書作成に要した人日と期間
- 延べ約420人日(5年間)…工事監理技術員(建物調査・記録保存・復原考証含む)の従事人日
- 延べ40人工…洋館周辺外構修景・植栽整備に従事した造園職人及び作業員
- 約38,000箇所…コンクリート再強化改修のために空けられたセメントスラリー注入孔
- 約15,000枚…外壁タイルの欠損破損部分修理のため復原された外壁白磁タイルの枚数
- 約4トン…屋根の復原修理に使用した屋根葺き用銅板の重量
- 約540箇所…木製建具や造作等の老朽部分の修理を行った継木(つぎき)・矧木(はぎき)修復箇所
- 約3,000枚…屋根下葺き(木端葺き・ザク葺き)修復に用いた木端(こば)材の枚数
- 72個(型)…漆喰壁修理のため製作した漆喰コーナー塗り用等の引き型(木製型枠)の個数
- 32.1㎡…復原された金唐革紙(1階食堂兼音楽室)
- 28.3㎡…復原された金唐革紙(2階食堂)
- 16人(通算8時間)…ビリヤードテーブル(参考展示品)の  
解体・移動・組み立て据え付けに要した延べ作業員と時間



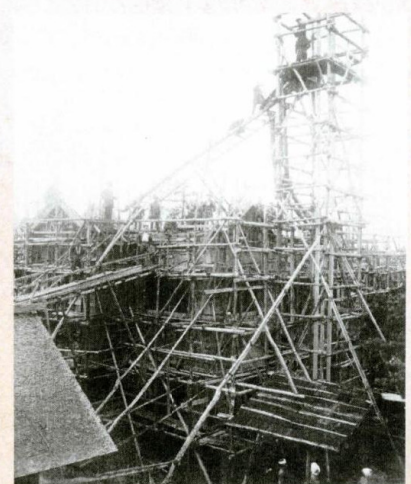
大正11年(1922)竣工



創建時の鉄筋施工の様子



創建時の工事写真 大正9年(1920)着工～大正11年(1922)竣工



創建時の工事足場の様子



# 地域の文化遺産を未来へ。

池田家の若き後継者が、村民供用の施設を庭園の一角に造った。秋田では初めて使う新しい材料(コンクリート)の建物。その精神や、材料、工法はとても意義深く、次世代に伝えるべく、創建当初にこだわった復原を目指しました。

文化財の「修理」は、原則として創建時の材料・工法を用い、傷んでいる部分のみを繕い、もとの材料を極力再利用します。また、過去に改造や撤去により失われたものを、建物に残る痕跡などを手掛かりに創建時と同じ材料・工法を用いて「復原」する工事も、同時に行われました。修復工事の施工においては、県内はもとより、全国の優れた伝統の技術を有する職人が腕を振りました。角館の最後のコバ職人が銅板屋根の下葺きを行い、国選定保存技術保持者の金唐革紙製作技術者が、内装壁紙の復原にあたりました。岐阜県多治見市の製陶会社は、当時の技術に立ち返り、焼き型の製作から、白磁タイルの復原に取り組みました。漆喰は、現場に左官小屋を建て、ノリ炊きから材料の調合まで昔ながらの製法で作りました。現代の職人にとっても、貴重な体験になったことと思います。

修復事業において、職人として工事に関わった人だけでなく、修復に関わった多くの人々の思いが込められた貴重な文化財を、地域の財産として将来にわたり継承していただければ幸いです。

## 名勝旧池田氏庭園洋館修復事業

### 修理方針

部分修理(屋根・躯体・外壁・内装工事ほか)

### 工事期間

平成18年8月～平成22年10月(51ヵ月)

### 総事業費(建造物分・工事監理含む)

総事業費 282,847,950円

収入内訳 国庫補助金 141,423,000円

大仙市支出金 141,424,950円

### 工事関係者

事業者 大仙市

大仙市教育委員会

事業担当 文化財保護課

工事担当・工事監督

都市計画課(平成18年度～21年度)

建築住宅課(平成22年度)

設計・工事監理

公益財団法人文化財建造物保存技術協会

工事請負 はりま建設株式会社大仙支店

## 修理工事概要

修復前の建物は鉄筋コンクリートの躯体全体に劣化や破損がみられた。さらに、屋根からの雨もりによる木部の腐朽や漆喰塗の剥落、シャンデリアや金唐革紙などの内装の破損・欠失などが確認された。

このようなことから、建物には鉄筋コンクリートの躯体を含めた根本的な修復が必要だった。そこで、本工事は躯体の健全化および各破損部の修理を目的として大規模な部分修理を行った。躯体の修理に際しては、内部造作を一旦解体し、躯体修理後、造作類を補修の上復旧した。建具枠や床板は、破損部の継木(つぎき)・矧木(はぎき)修理を行った。床敷物(リノリウム・カーペット)は痕跡等により整備した。金唐革紙は既存の柄を基に製作し、1階食堂兼音楽室及び2階食堂壁面に貼り込んだ。

## 現状変更要旨

建造物修理に伴う調査によって、建設当時の姿とその後の変遷がほぼ明らかとなったので、以下の復原整備を行った。

- 一 塔屋屋根を撤去し、塔屋ドームを復旧整備した。
- 二 屋根瓦葺きの屋根を解体し、銅板一文字葺を復原した。
- 三 南面テラスに面する引違い戸及び片開き戸の上部に庇を復旧整備した。
- 四 屋上庭園の手摺親柱頂部に灯具を復旧整備した。
- 五 1階食堂兼音楽室と図書館境の扉枠を撤去し、壁を復原した。
- 六 2階図書館階段を塞いでいた床板を撤去し、階段手摺を復旧整備した。
- 七 1階、2階図書館の畳を撤去し、化粧床板を現すとともに、書棚の一部を復原した。

発行/秋田県大仙市教育委員会 平成22年10月

編集/大仙市教育委員会 文化財保護課

<http://www.daisen.akita.jp>

編集協力/大仙市建設部建築住宅課

公益財団法人 文化財建造物保存技術協会

史料協力/池田家

